

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 初対面二者間会話における「丁寧度を示すマーカーのない発話」の日韓対照研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇佐美, まゆみ, 李, 恩美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://repository.ninjal.ac.jp/records/3608">https://repository.ninjal.ac.jp/records/3608</a>

## 初対面二者間会話における「丁寧度を示すマーカ―のない発話」の 日韓対照研究

宇佐美まゆみ\*・李恩美\*\*

### 1. はじめに

日本語と韓国語は、ともに複雑な敬語体系を有する言語としてよく知られており、従来、日韓両言語の敬語、待遇表現の研究、及び、比較・対照研究が盛んに行われてきた(梅田、荻野他 1990、1991、金笑榮 1993、兪송영 1996、池田 2000、李琴華 2001 など)。しかし、逆に、敬語などの丁寧度を示すマーカ―のない発話が、実際の会話の中で果たす役割に着目した研究は、ほとんどなかった。そういう中、宇佐美(2001)は、社会人初対面二者間の日本語 72 会話のデータの分析に基づいて、総発話文数の約 25~30%を占めている「丁寧度を示すマーカ―のない発話」が、対目上や対目下という話者間の年齢、社会的地位が非対称的な会話においてより多く使われていることを指摘し、その機能を、上下関係を明示することを避けたいという現代日本人の平等を重んじる価値観の反映であると解釈している。また、それを受けて、李恩美(2003)は、韓国語における「丁寧度を示すマーカ―のない発話」について初めて扱い、日韓対照研究を行っている。しかし、その分析は、文末のみに限られており、発話文全体を分析するまでには至っていなかった。

#### 1.1 目的

本研究では、日本語と韓国語の初対面二者間の自然会話における「丁寧度を示すマーカ―のない発話」の機能を、宇佐美(1998、2001)の「ディスコース・ポライトネス<sup>1)</sup>」という観点から分析し、日韓両言語における類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

#### 1.2 「丁寧度を示すマーカ―のない発話」の定義

本研究において、「丁寧度を示すマーカ―」とは、文末のスピーチレベルにおいては、「です」「ます」/「だ」「である」などの敬体/常体とする。また発話文全体のスピーチレベルは、「尊敬語」、「謙譲語」や尊敬・丁寧などを表す接頭辞「お/ご」などを「丁寧度を示すマーカ―」とみなす。「丁寧度を示すマーカ―のない発話」とは、それらのマーカ―のない発話と定義する。

### 2. 研究方法

\* 東京外国語大学教授

\*\* 東京外国語大学大学院研究生

<sup>1)</sup>宇佐美(1998: 152)は、「ディスコース・ポライトネス」を「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体」と定義している。そして、「敬語を有する言語、そうでない言語双方において、ポライトネスは「社会的規範や慣習に従った言語使用」と「話者個人の方略的な言語使用」の二つの側面から、また、それらの相互作用を考慮して、談話レベルで捉えていく必要がある。」と述べている。

### 2.1 実験計画・被験者

実験計画、及び、以下の実験の手順は、宇佐美(1999、2002)にならった。ベースとなる被験者は 35 歳の男女、大学卒で有職の人、または、社会経験のある人とした。日韓ともにベースの数は、女性 2 人、男性 2 人(合計 8 人)で、一人のベースに、初対面の相手 6 人とそれぞれ会話をしてもらった。一人のベースが行った会話の組み合わせを図 1 に示す。

ベース	対話相手	
	(BF: Base Female, 35 歳)	OF (Older Female, 45 歳) SF (Same-age Female, 35 歳) YF (Younger Female, 25 歳)
ベース	OF (Older Female, 45 歳) SF (Same-age Female, 35 歳) YF (Younger Female, 25 歳)	OM (Older Male, 45 歳) SM (Same-age Male, 35 歳) YM (Younger Male, 25 歳)
(BM: Base Male, 35 歳)		

図 1 会話の組み合わせ

### 2.2 実験手順

宇佐美(1999、2002)にならい、日韓ともにベースとなる一人の被験者に対し、実験者不在で「年上」「同年齢」「年下」の同性、異性と各々 15 分程度、会話をしてもらった。話題は、特に与えず、自然に話すよう依頼した。会話終了後は、会話の妥当性を確認するため、フォローアップ・アンケートを行った。

### 2.3 分析方法

上記の方法で得られた 48 会話のデータを、宇佐美(2003)の「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」に基づいて、最初から 10 分間の会話を文字化した(合計: 8 時間)。また、文字化したデータを分析項目別にコーディングした。文字化資料の発話文の区切り方、及び、分析項目のコーディングについては、それが分析者の主観によるものではなく、信頼性のあるものであることを確認するために、第二認定者との一致率を算出した<sup>2)</sup>。

### 2.4 分析項目

「丁寧度を示すマーカ―のない発話(No Marker: NM)」の機能を総合的に分析するために、まず、NM になりやすいあいづちの発話を、実質的な発話と分けてコーディングする。また、すべての発話文を i. 「文末」が敬体か常体か、丁寧度を示すマーカ―のない発話か、ii. 「発話文全体」に尊敬語、謙譲語などが含まれるかどうかという二つの観点から、文末のスピーチレベルと発話文全体のスピーチレベルをコーディングする。

#### ① 発話文のタイプ

- SB : Substantive utterance (実質的な発話。命題的な意味を持っている発話。)
- BA : Backchannel (あいづち的な発話。相手の発話を聞いているという機能を持つあいづち的な発話や相手の質問などに答えるという受身的な機能を持つ応答詞的な発話など)

<sup>2)</sup>文字化した会話の資料の 10%を、分析者と第二認定者が、それぞれ個別に発話文の区切り方とコーディングを行い、その区切り方とコーディングの一致率を Cohen's Kappa (Bakeman and Gottman, 1986) を用いて確認した。

②スピーチレベル

i. 文末のスピーチレベル：文末の形式のみによって判断する。

- P : Polite-form (敬体)
- N : Non-polite form (常体)
- NM : No-marker (丁寧度を示すマーカのない発話：上記の敬体や常体がない発話)

ii. 発話文全体のスピーチレベル：一つの発話文に含まれる形式の丁寧度のもっとも高いものによってコーディングする。例えば、その発話文に尊敬語がひとつでも含まれていれば、「S」とする。

- S : Super-polite form (尊敬語、謙譲語、美化語等を含む発話)
- P : Polite-form (敬体を含む発話)
- N : Non-polite form (常体を含む発話)
- NM : No-marker (丁寧度を示すマーカのない発話：ええ、はいなどのあいづち詞や応答詞、中途終了型発話など)

以下に、日本語・韓国語それぞれにおけるコーディングの例を示す。

	発話文全体	文末	タイプ
<日本語> 例1) JBF03 /沈黙3秒/ 先生、じゃその一先生のご専門は、国文学…？。	S	NM	SB
例2) JBF08 お生まれはどちらですか？。	S	P	SB
例3) JOM01 まあ、皆さんね、(はい) 狙っておりますからね。	S	P	BA
JBM01 あー、<なるほど。> {<}	NM	NM	BA
JOM01 <えー。> {>}	NM	NM	BA
<韓国語> 例4) KYM02 스물 아홉?? (29??.)	NM	NM	SB
KBM03 <웃으면서> 스물 아홉 맞는데. (<笑いながら>29合ってるんだけど.)	N	N	SB

3. 結果及び考察

3.1 実質的発話とあいづち的発話の分布

ベース話者の総発話文数に占めるあいづち的発話の割合の平均値をみると、日本語が35.0%、韓国語が26.9%であり、日本語の方が韓国語に比べ、あいづち的発話の使用割合がやや高くなっている。以下の図2と図3に日韓両言語における各ベースによる対話相手ごとの実質的発話とあいづち的発話の使用割合を示す。

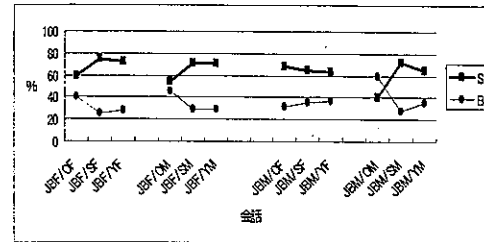


図2 日本語における (SB) と (BA) の使用割合

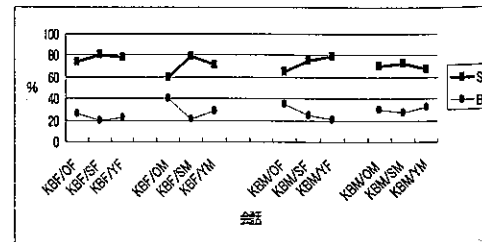


図3 韓国語における (SB) と (BA) の使用割合

全般的に日韓ともに目上に対して、あいづち的発話の使用割合が高くなっている。これは、年上との会話においては、年上の人が発言が多くなり、年下の人が聞き役に回っていることを表している。

3.2 各発話のスピーチレベルと丁寧度を示すマーカのない発話

ここでは、各発話のスピーチレベルと「丁寧度を示すマーカのない発話」の分布を示し、「丁寧度を示すマーカのない発話」の機能を談話レベルから総合的に考察する。

3.2.1 文末のスピーチレベル

まず、図4、5に日本語と韓国語における文末のスピーチレベルの使用割合を示す。

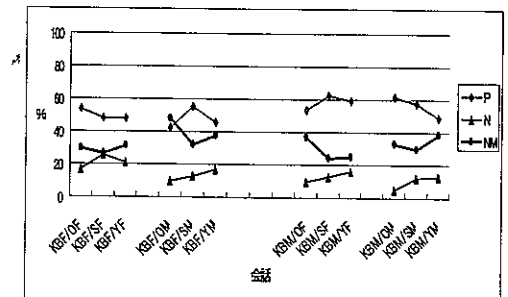
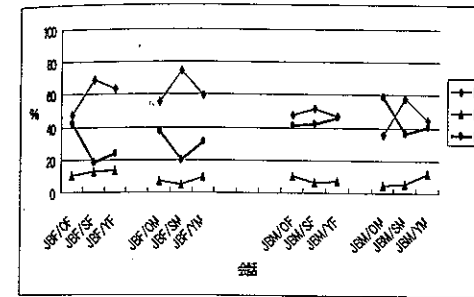


図4 日本語における文末のスピーチレベルの使用割合 図5 韓国語における文末のスピーチレベルの使用割合

日韓両言語における文末のスピーチレベルの全体の使用割合の平均値をみると、日本語では、Pが54.3%、Nが8.9%、NMが36.8%、韓国語では、Pが53.4%、Nが14.5%、NMが32.1%である。

図4、5をみると、日本語においては、Pは、意外にも同年齢との会話に高くなっており、韓国語では、異性の同年齢の相手に対してもっとも高くなっている。こうした結果は年上に対してあいづち的発話が多いことと関わっていると考えられる。

また、Nは、その使用割合はPとNMに比べて低いが、韓国語の女性ベースと同性、同年齢の対話相手との会話を除くと、Nの使用割合は年上との会話から年下との会話に行くにつれてやや高くなる傾向を見せている。そうした傾向は日本語に比べ、韓国語の場合に顕著である。

NMの使用割合は、日本語においては、対話相手に応じて18.2~58.8%、韓国語においては24.2~48.5%でばらつきがあるが、年齢の差がある対話者との会話において高く、同年齢の対話者との会話では、その割合が低くなっている。

図6、7に、文末のスピーチレベルとNMの関係をもっと明らかにするため、NMを除いた文末のスピーチレベルの使用割合を示す。図6、7をみると、全般的に年上に対して、Pの使用割合が高く、年下に対してNの使用割合が高い傾向が見られる。より詳しくみると、図4、5に比べ、日韓ともに、年上に対してPの使用割合が高くなっている。日本語では、主にNの使用により上下関係が言語に反映される傾向があるが、韓国語ではP、N両方の使用に上下関係が反映されていると考えられる。こうした年齢という上下関係を反映した言語使用を目立たせなくするのも、NMの機能の一つであると考えられる。

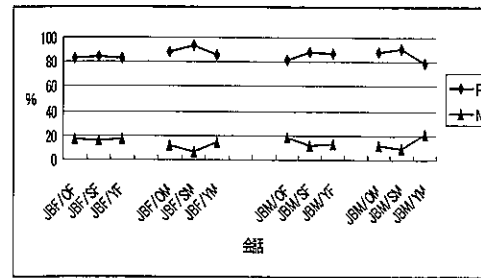


図 6 日本語における文末のスピーチレベルの使用割合 (NM を除いたもの)

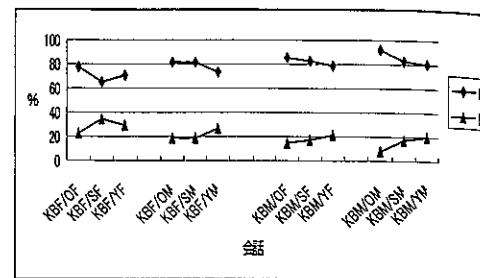


図 7 韓国語における文末のスピーチレベルの使用割合 (NM を除いたもの)

### 3.2.2 発話文全体のスピーチレベル

3.2.1 では、日本語と韓国語における文末のスピーチレベルについてみたが、以下の図 8、9 には日本語と韓国語における発話文全体のスピーチレベルの使用割合を示す。

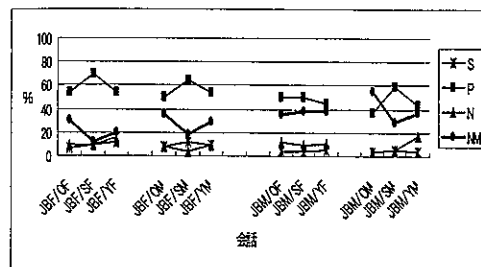


図 8 日本語における発話文全体のスピーチレベルの使用割合

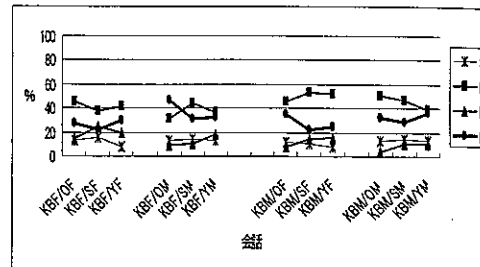


図 9 韓国語における発話文全体のスピーチレベルの使用割合

日韓両言語における発話文全体のスピーチレベルの全体の使用割合の平均値をみると、日本語では、S が 7.1%、P が 52.4%、N が 8.1%、NM が 32.4%、韓国語では、S が 12.4%、P が 43.6%、N が 13.4%、NM が 30.6% である。

日本語の場合は同年齢との会話において P の使用割合が高くなっているが、韓国語の場合は同性との会話では年上に対して、異性との会話では同年齢に対して P の使用割合がもっとも高くなっている。S の使用割合をみると日本語では、ベースが女性の場合に、その使用割合が高くなっている。それに対し韓国語では、日本語に比べ全体的に S の使用割合がやや高く、ベースの性別による差はあまりみられない。データを質的に見てみると、日本語においては、「お名前」「ご仕事」などの「お/ご」の使用が多いが、韓国語では、主に尊敬接辞「시[si]」の使用が多くなっている。

以下の図 10、11 に総発話文数から NM を除いた発話文全体の文末のスピーチレベルの使用割合を示す。図 10、11 をみると分かるように、NM を除いてスピーチレベルの使用割合を算出してみると、日韓両言語において、図 8、9 に比べ、年上に対する P の使用割合が、相対的に増えることが分かる。NM は、文末スピーチレベルでの傾向と同じように、発話文全体のスピーチレベルにおいても、年齢という上下関係をスピーチレベルが示すことをあいまいにしていると考えられ

る。

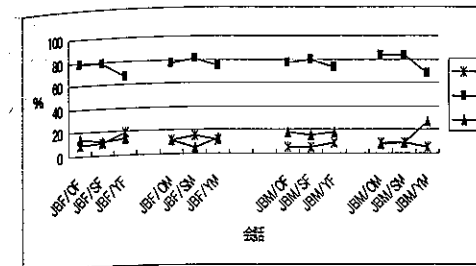


図 10 日本語における発話文全体のスピーチレベルの使用割合 (NM を除いたもの)

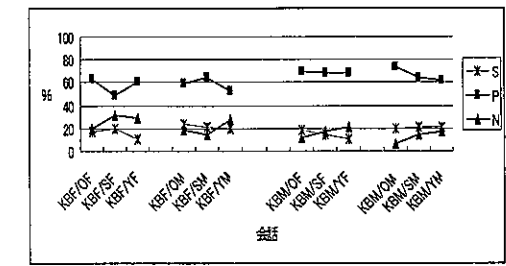


図 11 韓国語における発話文全体のスピーチレベルの使用割合 (NM を除いたもの)

### 3.3 丁寧度を示すマーカーのない発話の機能

以上では、日本語と韓国語における文末と発話文全体のスピーチレベルとその中の NM を総合的に考察した。さらに NM をもっと詳しく、かつ質的に考察するために、文末スピーチレベルが NM であった発話文に焦点を当てる。図 12、13 には、日本語と韓国語の、文末スピーチレベルが NM である場合の発話文全体スピーチレベルの使用割合を示す。また、図 14、15 には、日本語と韓国語の、文末スピーチレベルが NM である場合の実質的な発話のスピーチレベルの使用割合を示す。

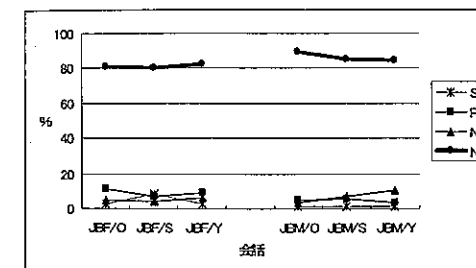


図 12 日本語の文末が NM である場合の発話文全体のスピーチレベルの使用割合

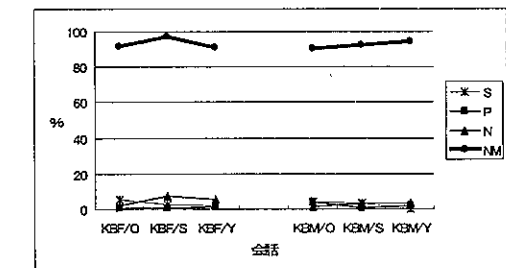


図 13 韓国語の文末が NM である場合の発話文全体のスピーチレベルの使用割合

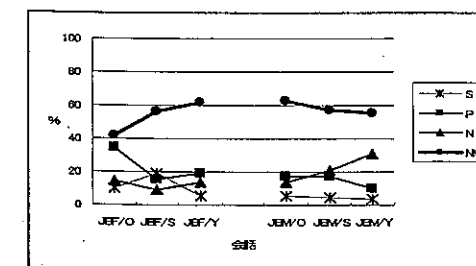


図 14 日本語の実質的な発話における文末が NM である場合の発話文全体のスピーチレベルの使用割合

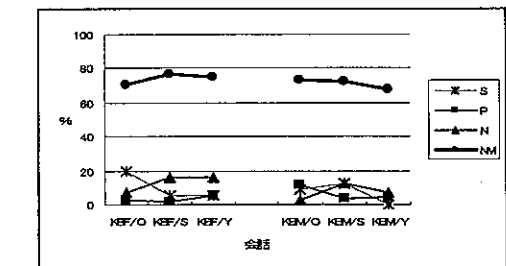


図 15 韓国語の実質的な発話における文末が NM である場合の発話文全体のスピーチレベルの使用割合

日韓両言語における文末が NM である場合のスピーチレベルの全体の使用割合の平均値をみる

と、日本語では、Sが3.1%、Pが6.9%、Nが6.2%、NMが83.8%、韓国語では、Sが2.9%、Pが1.7%、Nが3.9%、NMが92.5%である。日本語と韓国語ともに、文末がNMである場合、発話文全体もNMである割合が80%以上と高くなっている。文末も発話文全体もNMである発話は、日本語、韓国語ともに、年上に対しては自分の意見をいう場合や相手の発話に対する繰り返しをする場合に多く使われており、年下に対しては相手に質問・確認をする時と情報応答やあいづちという反応の発話機能に多く使われている。以下に、日韓それぞれの例を示す。

例5) JOM03 あれは、あのー、プログラマーって・・・。

JBF08 あっ、プログラマー、あーあー。

例6) JBM03 え、もともとずっと東京で？。

JYM01 そうですね、生れが東京で、大学のときにあのー茨城県のほうに、  
(あー)行ってきました。

例7) KBM03 아, 대학원만? (あ、大学院だけ?)

KYF02 예. (はい。)

また、情報要求や質問をする時、年上に対しては、「それはなにか目的が…?」「電車の混みもそんなに…?」などのように中途終了型発話を使っているが、年下に対しては、「何を?」「あなたは?」のように短く、言い切っている発話を使う傾向も見られた。

図14、15をみると、韓国語と比べ、日本語では、発話文全体のスピーチレベルがPとなる割合が高いことが分かる。以下の例のように、日本語の場合は、特に年上の対話相手との会話で、従属節の文末でPを使いながら主節は述語まで言わず、発話文全体スピーチレベルがPとなる傾向が見られた。こうした傾向は韓国語ではあまり見られない。このような現象は、韓国語では特に目上に対して文を最後まで言わないことはあまり丁寧とはされないことと関係があると考えられる。

例8) JOM01 長野はまーいらっしゃるんですか?。>[<

JBM03 <え>[>長野はもう、あの父の実家に行きますと、(えー)お墓行きますと「JBM03 姓」家の墓  
っていうのがもうずらーとっていう。

#### 4. まとめ

「丁寧度を示すマーカのない発話」は、日本語の方が、韓国語に比べ、使用割合がやや高くなっているが、全体的には、日韓両言語において、年齢の差がある対話者との会話において高く、同年齢の対話者との会話では、その割合が低くなっている。3.2で考察したように、「丁寧度を示すマーカのない発話」は、日韓両言語において、言語形式によって上下関係を明示することを避け、それを曖昧にする機能を果たしていることが明らかになった。しかし、この傾向は日本語においてより顕著であり、韓国語ではそうした傾向は弱かった。また、日韓両言語において、文末に「丁寧度を示すマーカ」がなくても、発話文全体のスピーチレベルを操作することによって、相手に対するなんらかの配慮を表明している場合もあることが明らかになった。特に、日本語では、年上の対話相手との会話では、主節は中途終了型発話になり、文末はNMとなるが、

従属節の文末でPを使うため、発話文全体のスピーチレベルはPとなるという傾向が見られた。しかし、今回の韓国語のデータでは、日本語のように複文の場合、主節がNMである例は見られなかった。これは、韓国語においては、文を言い切ったほうが丁寧であると捉えられており、中途終了型発話が相対的に少ないという言語使用の差を表していると考えられる。

本研究で考察した「丁寧度を示すマーカのない発話」の機能は、日韓両言語において程度の違いはあるものの、年上に対しては、親しくなりたい、心的距離を縮めたいが、相手に対する丁寧度を保つために、常体は使えないという話し手の微妙な心理を反映するものであることが示唆された。また、年下に対する傾向は、初対面という改まった場面において、常体を使うことが多い年下の相手に対して、ある程度改まった会話をしようとする話し手の配慮の表れであると考えられる。

このように、「丁寧度を示すマーカのない発話」を談話レベルから分析することによって、それが相手や文脈に応じて異なる機能を果たしていることが明らかになった。

「丁寧度を示すマーカのない発話」は、文字通り、丁寧度を明示していないにもかかわらず、談話の中においては、円滑なコミュニケーションのための言語ストラテジーとしてのポライトネス・ストラテジーの機能を果たしているのである。この事実は、本研究が行ったように、談話レベルにおいてディスコース・ポライトネスという観点から分析することによって、初めて明らかになることである。

今後は、より多くのデータに基づいて、「丁寧度を示すマーカのない発話」がディスコース・ポライトネスに果たす役割について、より詳細な分析を行う予定である。

#### <主な参考文献>

- 宇佐美まゆみ (1998) 「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」『日本研究教育年報 1997 年度版』147-161、東京外国語大学日本課程編
- \_\_\_\_\_ (1999) 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ」『日本語学』第18巻10号、40-56、明治書院
- \_\_\_\_\_ (2001a) 「21世紀の社会と日本語—ポライトネスのゆくえを中心に—」『月刊言語』第30巻第1号(1月号特集「21世紀の日本語」)、20-28、大修館書店
- \_\_\_\_\_ (2001b) 「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」『語学研究所論集』第6号、1-29、東京外国語大学語学研究所
- Brown, P. & Levinson, S. C (1987) *Politeness - Some universals in language usage* Cambridge: Cambridge University Press
- Usami, Mayumi (2002) *Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory politeness*, Tokyo: HITUZU SYOBO
- 李恩美 (2003) 「『丁寧度を示すマーカのない発話』の日韓対照研究—その機能を中心に—」東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文